2024年4月　園長だより

2024年4月26日(金)
敦賀教会幼稚園　園長　有岡史季

「新しい歌を、主に向かって歌え」
(旧約聖書　詩編96編1節より・・・4月の聖句)

だいたい牧師をしている人間は、歌が上手だったり、楽器が弾けたりします。それらは牧師になるための必須条件ではありませんが、礼拝では必ず讃美歌を歌いますし、時には奏楽がない状態で、牧師だけが独唱することもあります。でも、私は、歌も楽器も非常に苦手です。母は、ピアノ教師(保育士なもので)、父はギター奏者(趣味ですが)、上の妹は母に倣って幼少からピアノを習い、下の妹は吹奏楽をしていました。なぜか私だけ全く音楽的経験がなく、楽譜も読めないし、楽器はおろか歌唱さえ悲惨という。かつて私の恩師も言いました。「有岡君、キミは聖書の研究もしっかりしているし、説教もちゃんとできている。ただ、悪いことは言わない、讃美歌だけはもっと頑張りなさい」と。私の歌唱下手は、恩師のお墨付き(？)だということです。

だから、楽譜が読めること、楽器が弾けること、音程を取れること。その全てに憧れを持っています。もちろん、今からでも練習すれば、獲得できる技能ではあるのかも知れませんが・・・。でも、純粋に凄いなぁって思います。そういえば、楽譜について面白いことを言う言語学者がいました。「もし、地球人類が滅亡した後、遥か彼方より宇宙人がやって来て、ある国の、ある家の書斎で小説原稿を見付けたとしよう。きっと、その宇宙人は参考にする為の同言語の文献を集め、また我々の想像を超える高度な翻訳機を用いて、そこに書いてある様々な心情風景に感動することができるだろう。しかし、その宇宙人がベートーベンの『運命』の楽譜を見つけたとしたら、頭を抱えるに違いない。何故なら、楽譜に書かれている記号の意味は、その形や並びだけでなく、どの音階にあるのか、どの程度の長さなのか、その音は強いのか、弱いのか、その前後の繋がりはどうなっているのか、といった膨大な情報を解析しなければならないからである。しかも、それを巧みに、かつ情感豊かに奏でることが必要なのだから」。・・・別に私が音楽に苦手意識を持っている言い訳をしたいわけではありませんが、音楽を奏でる、歌うと言うのは、言語学的見地から考えますと、実は、非常に高度なことなのだと思います。

ところで、「人類滅亡後における音楽再現の難しさ」について、それは言語学を語る上での譬え話に過ぎませんが、実際に、同じような困難はすでに起こっています。4月の聖句が含まれている「詩編」という書は、もともと旋律を伴った「歌」であったとされています。しかし、現状、その歌うための旋律は失われてしまっており、私たちは詩編の言葉をただ読むことしかできません。詩編には、所々「セラ」という記述が見られますが、これは当時の音楽用語だったらしいという仮説に留まり、その意味と機能は今なお不明なままです。いつか聖書学や考古学が深まり、詩編に旋律が戻ればいいなぁ、と願っています。

ただ、旋律の喪失とは言え、詩編に遡ること数千年に及ぶ教会音楽の蓄積は、今、子ども達が歌っている賛美歌にも受け継がれています。とくに意識することではないですが、キリスト教(とその前身であるユダヤ教)が積み重ねてきた信仰の厚みと同じ分だけの、旋律の豊かさ、歌詞の深さを、子ども達は幼稚園のお部屋や礼拝堂で経験し、味わっています。多分、それってキリスト教ならではの、とても素晴らしいことなんじゃないかな、と。敦賀教会幼稚園の子ども達は、たくさんの賛美歌を、本当に上手に歌います。ECEQ公開保育の時も、そんなお褒めの言葉を頂きました。私自身、苦手だからこそ思います。歌うって素晴らしいことです。一緒に旋律に乗れるって楽しいことです。2024年度も、子ども達の歌声が楽しく響く幼稚園でありたいと思います。また色々な機会で、ご家庭の皆さまとも、子ども達の歌声を、そして、ご一緒に歌うことを楽しみ、分かち合うことができれば幸いです。今年度も、よろしくお願い致します。